

近世後期における庶民教育

——とくに全国と徳山市域の比較を中心に——

会員 小林省三

はじめに

庶民教育機関の中心であった私塾・寺子屋は、一八世紀中期から開設数が増加した。とくに庶民の日常生活・生産活動の進展が読み書きへの必要・要求を高めたとことや幕藩当局の庶民教化政策を背景として、宝暦期・天明期・天保期を画期として近世後期には飛躍的增加をみせた。

徳山市域が含まれる山口県は、当時庶民教育機関として寺子屋開設数が全国第二位であった。

こうした史実を踏まえた上での本稿の課題は、近世後期の庶民教育においていちばん基礎的と考えられる特色の解明と、全国などと徳山市域の庶民教育機関を

比較するという手法により、いくつかの徳山市域の庶民教育の特色を指摘することを主とするものである。

一、近世後期の庶民教育

本節では、近世後期の庶民教育におけるいくつかの特色を指摘してみたい。

(1) 寺子屋数

近世後期の寺子屋数は、『日本教育史資料』¹⁾によれば全国で一五六〇一校、県別では長野県一三四一校、山口県一三〇四校、岡山県一〇三一校となっているが、実際にはその数倍はあったであろう。江戸では寺子屋が九〇〇から一〇〇〇校存在したといわれているが、

前記資料では二九七校しか上げていないから、実数の三分の一しか載せていないわけである。⁽²⁾

(2) 近世における庶民教育説

江戸時代に教育を論じた学者の見解では、みな武士にとってそれが必要だという点では意見が一致していた。しかし、庶民に教育を与えることの可否については、このような意見の一致はなかった。

武士道学派といわれる山鹿素行のように「教育は士のみが必要であるのではなく、農工商通じて万民に必要⁽³⁾」であると説くものもいたが、一八世紀の始めにその庶民観として、「民は愚なる者」という典型的な愚民観をもっていた荻生徂徠は、この「愚民」への教育について「民間ノ輩ニハ、孝悌忠信ヲ知ラシムルヨリ外ノ事ハ不入ナリ。孝経・烈女伝・三綱行実ノ類ヲ出ヅベカラズ。其外ノ学問ハ、人ノ邪智ヲマシ、散々ノコトナリ。民ニ邪智盛ナレバ、治メガタキ者ナリ」と述べている。ここから分かるように、徂徠は、庶民には「孝悌忠信」のほかには特別の教育は無用、有害であ

るとしている。また、江戸時代中・後期の経世思想家である林子平は、庶民がその家業に専心するために必要な技芸以外のものを学ぶことは禁じなければならぬと主張している。⁽⁵⁾

正学派朱子学の立場をとる頼春水は、一七八一年(天明元)広島藩儒に登用され、学問所の創設に参加したが、彼も朱子学による統一的な教育の対象は豪農商層や村役人層までに限定し、彼らを通して一般庶民への教化がなされればそれで十分と考えていた。⁽⁶⁾

(3) 幕藩当局の庶民教育に対する関心

庶民教育の中核である寺子屋に対する当局の関心は散発的なもので、大体において当局の態度は、基礎的な読み書きなら庶民自身で何とかするであろうというところであった。現在までのところ何れの藩でも藩当局が寺子屋を建設したという記録はでない。

米沢藩や津和野藩のように寺子屋を禁止したり、富山藩のように寺子屋の内容を干渉したり、勝山藩のように月末に生徒の氏名と出席点数を届け出させたり、

また、小浜藩では出席勤惰数の帳簿を出させたり、芝村藩では、役人が領内を毎年巡視して寺子屋の成績のよい者を藩主に申し立て賞与する習わしがあったような例もあるが、一般には藩当局は庶民教育を放任していたとみてよい。⁷⁾

しかし、近世後期になると町民は、商品経済の発達
のなかで、幕藩当局の指示なしに自発的に寺子屋を開設し、子供たちに読み書き算術を教え、生活に必要な基礎学力を獲得する努力を続けた。また、農民も生産を向上させるため農業技術書を読み、村外の人々と交流する必要上、学力の獲得を迫られ農民自身で寺子屋を開設するようになった。

幕藩制国家における庶民は、みずからの知識獲得手段を、みずから組織しようとしたのであり、この周知の事実をとりあえず確認しておくことが重要である。

そして、庶民教育は、幕藩当局やそのイデオログの意図をのり越える新しい展開をみせていったことも間違いない事実である。

二、近世後期の徳山市域における庶民教育

本節では、近世後期の徳山市域における庶民教育についていくつかの特色を指摘してみたい。

(1) 私塾・寺子屋数

近世後期の徳山市域における私塾・寺子屋の普及状況は、前記『日本教育史資料』によれば開設数三四校であるが、実際には文献などから数倍の私塾・寺子屋が存在していたことが推定できる。⁸⁾

この度、筆者自身が調査したところ、資料として徳山市域に開設されたことが記録されているものは、少なくとも七六校はあることが確認できた。その結果を表1に示した。

(2) 私塾と寺子屋の開設年代と普及

私塾と寺子屋は、中世末期から近代初頭にかけて普及した庶民教育機関であるが、その開設年代は各地域で差がある。とくに寺子屋数が急激な膨張を示したのは庶民階級の物心両面における台頭の結果であることはいままでもなく、事実、そのことを裏書きするよう

に早い時期の寺子屋と幕末期に開設された寺子屋とは、その形態や内容においてかなりの相違が認められる。

また、寺子屋は、明治五年七月に太政官より発せられた「仰被出書」

表2. 私塾と寺子屋の普及

地域名	合計	江戸時代	明治以降
全国	14,110	12,844 91.0%	1,266 9.0%
山口県	1,250	1,052 84.2%	198 15.8%
徳山市域	38	25 65.8%	13 34.2%

- 1) 『日本教育史資料』8・9、海原 徹『近世の学校と教育など』により作成。
- 2) 徳山市域は、表1「徳山市域私塾・寺子屋一覧表」による。
- 3) 不明分は除外した。

の趣意により、明治五年八月に全国統一の教育制度を布くため「学制」が頒布され、その実質的な成果が生じ始め、新しい小学校が開設されたときその遺産を引き渡し消滅した。徳山市域における寺子屋の消滅時期は、明治五年創

立の桜馬場小学から明治一三年創立の天津島小学・馬島分校の期間となっている。

そこで、江戸時代と明治以後に分類し、徳山市域の私塾と寺子屋の開設年代と普及を全国および山口県のそれと比較することにより、徳山市域の私塾と寺子屋の特色について考察した。

全国では、寺子屋は一四六九年（天明元）から一六一五年（天和元）までに一七校開かれており、その普及も江戸時代には全私塾と寺子屋の九一・〇％が開設されていた。また、山口県では私塾と寺子屋の八四・二％が江戸時代に開設されて

表3. 徳山市域の私塾と寺子屋開設年代

年号	西暦(年数)	校数
天保	1830~44	1
弘化	1844~48	1
嘉永	1848~54	7
安政	1854~60	1
延久	1860~61	1
文久	1861~64	4
慶治	1864~68	10
明治	1868~	13
合計		38

いる。

ところが、徳山市域では私塾と寺子屋の開設は、一七八五年（天明五）の藩校「鳴鳳館」開設の約五〇年後の一八四〇年（天保一〇）に始めて旧徳山村に寺子屋が一所開設され、江戸時代にはようやく六五・八％が開設された程度であった。このことにより、徳山市域の私塾と寺子屋は全国および山口県に比して、その開設年代や普及が遅れていたといえる。

(3) 私塾と寺子屋の師匠

私塾や寺子屋の師匠は大てい経営者であり、特定の身分に限られず、農・町民を主とする平民や士分・僧侶・医師・神官などで構成されていた。

これら師匠の構成分布は、各地域で差が認められる。そこで、徳山市域の私塾と寺子屋の師匠の構成分布を全国・長野県・岡山県および山口県のそれと比較することにより、徳山市域の私塾と寺子屋の特色について考察した。

全国では、平民出身者の構成比率が四〇％で他の身

分の出身者より

一番高く、長野

県（五六％）、

岡山県（五〇％）

も同様な傾向を

示した。

ところが、山

口県では士分出

身者の構成比率

が、五〇％で一

番高く、徳山市

域も同様の傾向

があり、士分比

率が四〇％で、

平民出身者は、

七％に過ぎなかつた。

このように徳山市域の私塾と寺

子屋の師匠の構成比率は、山口県の傾向と同様に士分出身者が一番高いことが判明した。⁹⁾

表4. 私塾と寺子屋師匠の分布

地域名	人数	平民	士分	僧侶	医師	神官
全国		40%	24%	19%	9%	8%
長野県		56%	14%	30%		-
岡山県		50%	15%	35%		-
山口県		20%	50%	20%	10%	-
徳山市域		7%	40%	24%	13%	16%
	55名	4名	22名	13名	7名	9名

- 1) 『日本教育史資料』8、海原 徹『近世の学校と教育』、田中真治『防長史講話』などにより作成。
- 2) 徳山市域は、表1「徳山市域私塾・寺子屋一覧表」による。
- 3) 不明分は除外した。

当時の私塾や寺子屋の師匠のなかには、「短日を丹日」と書き、「左清右濁の書法もさらに瓣へず、永字八法なと有事は夢にも知ら^⑩」ない師匠などが存在していたことも事実であり、必ずしも教師として十分な資格所有者のみに限られていなかった一般的な傾向を窺わせる文献も多い^⑪。

そのような時期に、徳山市域の私塾や寺子屋の師匠として士分出身者の構成比率が高いことは、「教育の最後を決定するものは教師の品質（人格・識見・実力）そのものである^⑫」とする見解のもとに、徳山市域の近世後期における庶民教育の優秀性を見い出すことができるのではなからうか。

(4) 算術教育の普及

徳山市域の私塾では、算術の教授が行われた記録がないので、ここでは考察対象を寺子屋のみとする。

寺子屋はしばしば手習子屋・手習戸などと別称されていたように、その教授内容は文字の使い方、すなわち文字を書いたり、読んだりすることが中心であった。

したがって、初期の寺子屋や田舎の寺子屋は一教科制をとるものが多かった。

たとえば、周防大島郡の三蒲村^⑬には、一二校の寺子屋があったが、そのうち一一校は習字一教科制であり、一校のみが習字、読書の二教科制であった^⑭。

早い時期の寺子屋と幕末期に登場した寺子屋とは、その形態や内容面でかなりの相違がみられることは先に指摘したが、幕末期には都市型化した寺子屋では、習字・読書の二教科に算術を追加し、三教科制を採用した寺子屋が多数開設された。

算術の教科書には吉田光由の『塵劫記^⑮』などが最もよく採用された。算術の教授内容はすべて珠算で、加減乗除比例の一通りを練習して開平開立をもってその極度とした。

このような史実をふまえて、徳山市域の寺子屋における算術教育の普及と当時の日本最大の都市であった

した。

読み・書きに並ぶ算術の採用は、都会や田舎の別と

表5. 各地域算術採用比率

地域名	校数	百分率
江戸市中15区	152 (223)	68.2%
山 口 県	169 (1,303)	12.9%
都 濃 郡	19 (73)	26.0%
徳 山 市 域	16 (36)	44.4%

- 1) 『日本教育史資料』8・9、海原 徹『近世の学校と教育』などにより作成。
- 2) 徳山市域は、表1「徳山市域私塾・寺小屋一覧表」による。
- 3) () 内は総校数
- 4) 江戸市中15区は、麴町、神田、日本橋、芝、京橋、麻生、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、浅草、本所、深川である。
- 5) 山口県は、旧長州藩領を示す。
- 6) 都濃郡は、現徳山・下松・新南陽・鹿野の3市1町である。(新南陽和田地区は除く)
- 7) 不明分は除外した。

市 中 一 五 区
の 寺 子 屋 に
つ いて み る
と、不 明 分
を 除 外 す れ
ば 二 三 三 校
中 一 五 三 校

実に六八・二%が算術を教科目に採用しているが、山口県の寺子屋一三〇三校のうち算術を教科目に採用していたのは僅かに一六九校、一二・九%に過ぎない。都濃郡の寺子屋は、七三校のうち算術を教科目に採用していたのは一九校、二六・〇%で山口県より採用率が高い。徳山市域の寺子屋は不明分を除外すれば三六

校中一六校、実に四四・四%が算術を教科目に採用している。江戸のような大都市に比して地方である山口県では、日常生活にまだ算術的教養をそれほど必要としていなかったということであろう。

しかし、徳山市域では私塾・寺子屋の開設、普及が遅かったことも要因となったかも知れないが、地方に於ては寺子屋における算術教育の採用度が高いことが判明した。ここに徳山市域の近世後期の庶民教育機関の優秀性を見出すことができる。¹⁷⁾

(5) 女子教育の普及

近世社会における著しい男尊女卑の風は、仏教思想と儒教思想に裏づけられたものである。もっとも仏教思想の影響を受けたものはそう多くなく、またほとんどが早い時代のものである。一方、儒教思想は教育のほとんど全野を支配していた。儒者の絶対的信条であった論語には、「唯女子ト小人トハ養ヒ難シト為ス。之ヲ近クレバ則孫ナラズ、之ヲ遠クレバ則怨ム¹⁸⁾」とある。これは当時の女子の地位の決定についての都合の

よい文句であった。また、「おんなは更に学問せぬものなめりと心得て、唐土の正しき書を読まず。此の国にて作れる物語・草紙など云う戯れたる書を多く読む^①」ものが、当時の風習であったという。

唯一の例外である津山藩を除いては、藩校や官・公立の学校で女子に門戸を開放したものは一校もない。

このような女子教育に対する考え方の影響のためか徳山市域の私塾では、女子教育が行われた記録がない。1したがって、ここでは考察対象を寺子屋のみとする。

前述のような女子教育に対する史実をふまえて、徳山市域の寺子屋における女子教育の普及と全国・山口県・江戸市中一五区・都濃郡における普及および旧徳山村と萩七町との女子教育の普及を比較することにより、徳山市域の寺子屋の特色について考察した。

全国では、女子教育の実施校が六二・五%であり過半数の寺子屋で行われていたことを示す。しかし、男女の比は前者の一〇〇に対して二〇程度であり高くない。

表6. 各地域女子教育普及

地域名	実施校数	百分率	男児との百分比
全国	8, 636 (13,816)	62.5%	20程度
山口県	629 (1,126)	55.9%	17.7
江戸市中15区	295 (297)	99.3%	89.6
都濃郡	45 (73)	61.6%	25.4
徳山市域	33 (34)	97.1%	35.2
旧徳山村	10 (10)	100.0%	42.1
萩7	12 (12)	100.0%	41.5

- 1) 『日本教育史資料』8・9、海原 徹『近世の学校と教育』などにより作成。
- 2) 徳山市域と旧徳山村は、表1「徳山市域私塾・寺子屋一覧表」による。
- 3) ()内は総校数
- 4) 山口県は、旧長州藩領を示す。
- 5) 都濃郡は、現徳山・下松・新南陽・鹿野の3市1町である。(新南陽和田地区は除く)
- 6) 萩7町は、平安古町・上五間町・古萩町・恵比須町・東浜崎町・細工町・北古萩町である。
- 7) 不明分は除外した。

さすがに日本第一の都市であった江戸市中一五区では、女子教育の実施校が九・三%であり、男女比も前者一〇〇に対して八九・六であり、女子教育の普及が極めて

進んでいたことが分かる。山口県では、女子教育の普及を示す全ての数値は最も低い。都濃郡の数値は全国に近く、地方にしては比較的女子教育が普及していた

ことが分かる。徳山市域では、女子教育の実施校が九七・一％であり、男女比も前者一〇〇に対して三五・二であり、江戸市中一五区ほどではないが、女子教育は全国・山口県・都濃郡などに比してかなり進んでいたことが分かる。つぎに萩本藩の中心地であった萩七町と徳山支藩の中心地であった旧徳山村における女子教育の普及を比較したところ両所とも女子教育の実施校は一〇〇％であり、男女比は旧徳山村が前者が一〇〇に対して四二・一、萩七町が前者一〇〇に対し四一・五であり旧徳山村がやや高い数値を示した。

これらの結果から、徳山市域の寺子屋における女子教育の普及が全国的にみても極めて高水準であったことを知ることができる。

おわりに

本稿では、近世後期の庶民教育において最も基礎的と考えられる特色の解明と、いくつかの徳山市域の庶民教育の特色の解明のための考察を試みた。その結果

として、以下の点を指摘した。

第一に、近世後期の庶民教育機関である私塾と寺子屋は、幕藩当局により開設されたものは一校もなく、幕藩制国家における庶民が、みずからの知識確保の手段として、みずから開設した。そして、このような庶民教育は、幕藩当局やそのイデオログの意図を乗り越え大きく展開していった。

第二に、近世後期における徳山市域の庶民教育の特色として、私塾と寺子屋の開設年代と普及、師匠の出自、算術教育の普及、女子教育の普及について

① 徳山市域の私塾と寺子屋は、全国および山口県に比して、その開設年代と普及が遅れていた。

② 師匠は、山口県と同様な傾向があり、士分出身者の構成比率が高く、師匠の資質という観点から徳山市域の庶民教育の優秀性を見出すことができた。

③ 地方には算術教育の採用度が高く、ここにもまた、徳山市域の庶民教育の優秀性を見出すことができた。

④ 徳山市域の寺子屋における女子教育の普及は、全国的にみても高水準であった。

さて、いつもの通り雑な検討に終始してしまっただが、近世後期の庶民教育の基礎的と考えられる特色や、当時の徳山市域の庶民教育についての特色のいくつかをここに指摘した。

- 註
- (1) 文部省編『日本教育史資料』一八八三年(明治一六) 文部省が各県当局に問い合わせて得た資料集
 - (2) 高橋俊乗著『増訂・改訂 日本教育史』(教育研究会、三四九頁)
 - (3) 高橋俊乗著『増訂・改訂 日本教育史』(教育研究会、二八〇～二八一頁)
 - (4) 荻生徂徠著『太平策大系』四八五頁
 - (5) 林 子平著『父兄訓』(『日本教育史文庫』訓誡篇上) 六八五頁
 - (6) 歴史学研究会編『講座日本歴史』近世2 (東京大学出版会、一八七頁)
 - (7) 高橋俊乗著『増訂・改訂 日本教育史』(教育研究会、三四一～三四二頁)
 - (8) 三好信浩編『日本教育史』(福村出版、七四頁) 『福井県教育百年史』を見ると、越前・若狭地方の寺子屋は、『日本教育史資料』では三二校に過ぎないけれど

- (9) も、実際には三七七校存在したことが確認されている。徳山市域内でも、旧徳山村、旧戸田村および旧湯野村では、士分出身者の構成比率が特に高く、旧徳山村で九二・三%、旧戸田村八〇・〇%、旧湯野村八五・五% (推定) であることは注目に値する。
- (10) 伏見猛弥他共著『日本教育史』(目黒書店、二二〇～二二一頁)
- (11) 『寺子屋物語』、『塵塚談』、『授業編』、『当世宗匠氣質』など。
- (12) 田中真治著『防長史講話』(山口県立小郡農業学校校友会、二九四頁)
- (13)(14) 現在の大島郡大島町内
- (15) 海原 徹著『近世の学校と教育』(思文館出版、三一三頁)
- (16) 吉田光由著『塵劫記』のほかに、『新塵劫記』、『改算智恵袋』などがある。
- (17) 現在の周南地方における寺子屋事情の一端を知ることができる。
- (18)(19) 旧徳山村での算術教育の普及度は三〇・〇%であり、徳山市域の算術教育の普及度四四・四% (旧徳山村以外算術教育の普及度は五〇・〇%) より低い。このような事実が注目に値する。
『論語陽貨論』
『女学範上之巻、学問大意』

表1.徳山市域私塾・寺子屋一覧表

私塾名 & 寺子屋名	所在地	塾主	塾主の 職業	開 業 年	生徒数		学 科	学習年限	参考文献
					男子	女子			
奨学館 阿弥陀堂 玉泉寺 立花堂 亀懐庵 専浄寺 光満寺	久米村	神本 清視	神官	慶応元~明治7	36	15	読書、習字、算術	8~9年	A、B
	久米村	河野 諸観	僧侶	慶応元~明治7	10	1	読書、習字、算術	3~6年	A、B
	久米村	森村 実円	僧侶	慶応2~明治7	87	43	読書、習字、算術	4~5年	A、B
	久米村	橋 栄学	僧侶	慶応3~明治7	23	10	読書、習字、算術	3~4年	A、B
	大島村	西藤 智英	僧侶	不詳~明治5	25	8	読書、習字	5年	A、B
	大津島	不詳	僧侶	明治元~不詳	18	5	読書、習字	5年	A、B
	大津島	未兼氏	医師	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	大津島	富山 要	流人	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	馬島	林 謹治	流人	不詳		不詳	不詳	不詳	D、F
	大享寺	大浦 善蔵	平民	明治6~明治7	37		読書、習字	不詳	D、F
大享寺	大浦	中山 善蔵	平民	明治6~明治7	47		習字	不詳	D、F
	大浦	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	徳山村	藤井 常香(私塾)	士分	慶応元~明治5	70	0	国書、漢籍	7年	A
	徳山村	野村 葆(私塾)	士分	明治2~明治5	20	0	経書、歴史	不詳	A
	徳山村	浅見 修次(私塾)	士分	明治2~不詳	30	0	漢学、文章	不詳	A
	徳山村	村上 愛治	士分	天保10~明治5	48	23	漢学、文章	3年	A、B
	徳山村	山県 友輔	士分	明治元~明治6	30	5	読書、習字	凡4年	A、B
	徳山村	富樫 佐	士分	慶応元~明治5	79	32	読書、習字	3年	A、B
	徳山村	三牧 春明	医師	文久2~明治5	35	20	読書、習字	4年	A、B
	徳山村	高杉 林蔵	士分	文久3~明治2	20	10	習字	2年	A、B
大享寺	徳山村	長西 栄次	士分	文久2~明治5	22	9	読書、習字	4年	A、B
	徳山村	岡 郁三	士分	明治元~明治5	18	9	読書、習字、算術	3年	A、B
	徳山村	長西 泰応	士分	嘉永元~明治3	40	25	読書、習字、算術	凡3年	A、B
	徳山村	河野 寛	士分	弘化2~明治2	86	27	読書、習字、算術	8年	A、B
	徳山村	戸村 敏輔	士分	文久2~明治5	61	25	読書、習字、算術	8年	A、B
	川曲村	河野 弥吉	平民	明治4~明治7	60	10	読書、習字、算術	凡3年	A、B
	四熊村	山崎 剛蔵	僧侶	明治6~明治7	7	2	習字	3年	A、B
	四熊村	渡辺 美之助	士分	明治元~明治5	15	12	習字	3年	A、B
	小畑村	佐伯 正誉	神官	慶応元~明治5	30	10	読書、習字、算術	4年	A、B
	大向村	仲子 縫殿	神官	嘉永3~明治5	15	5	読書、習字、算術	5年	A、B
大享寺	大向村	仲子 勝馬	神官	嘉永元~不詳	25	5	読書、習字	凡3年	B、C
	大向村	仲子 言智	神官	嘉永元~不詳	25	5	読書、習字	凡3年	B、C
	大道理村	佐村 峰彌	医師	慶応3~明治6	15	0	読書、習字	3年	A、B
	大道理村	田中 熊之進	平民	嘉永元~不詳	35	5	読書、習字	凡3年	B、C
	大道理村	田中 莊兵衛	平民	嘉永元~不詳	35	5	読書、習字	凡3年	B、C
	須々万村	井上 時介	士分	不詳		不詳	不詳	不詳	E
	須々万村	西村 長吉	士分	不詳		不詳	不詳	不詳	E
	須々万村	前田 信次郎	士分	不詳		不詳	不詳	不詳	E
	須々万村	宮村 貫一	神官	不詳		不詳	不詳	不詳	E
	須々万村	未広 方光	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	E
日新堂	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	不詳	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	F
思齊塾	須々万村	榎部 楽哉	医師	慶応2~明治5	20	6	読書、習字	不詳	B、C
	須々万村	信吉 勤彦	神官	万延元~明治5	20	6	読書、習字	不詳	B、C
	須々万村	河村 直蔵	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	斎藤 友雄	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	須々万村	大田 玄道	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	金峯村	石村 真人	神官	不詳		不詳	不詳	不詳	F
	中須村	河村 竹溪	医師	安政以後		不詳	不詳	不詳	A
	中須村	内山 徳右衛門	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	E
	中須村	内山 藤太郎	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	E
	中須村	藤川 孫十郎	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	E
童蒙舎 容衆堂	中須村	鶴飼 佐市	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	E
	長穂村	浅見 涛雄	医師	明治2~明治5	38	12	読書、習字、算術	不詳	B、C
	戸田村	山田 恭蔵(私塾)	医師	慶応元~明治6	25	0	歴史、経学、詩文	8年	A
	戸田村	劍持 英男	士分	嘉永2~明治6	15	5	習字、算術	4年	A、B
	戸田村	坂田 晋作	士分	明治3~明治6	30	10	読書、習字、算術	5年	A、B
	戸田村	坂田 彦兵衛	士分	不詳~明治2	32	8	読書、習字、算術	3~5年	A、B、C
	戸田村	藤井 幹蔵	士分	不詳~明治5	52	13	読書、習字、算術	3~6年	B、C
	湯野村	吉田 新右衛門	士分	不詳~明治4	32	13	読書、習字、算術	3~5年	B、C
	湯野村	吉田 為之助	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	田中 兵衛	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
山下塾 福永塾 村橋塾 大谷塾 楞巖寺塾 弘中塾 池永塾 西郷塾 椋木塾	湯野村	田中 半郎	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	山下 某人	神官	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	福永 淑人	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	村橋 一江	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	大谷 巖	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	貫之 和尚	僧侶	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	弘中 六郎	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	池永 勇次	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	西郷 安宅	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D
	湯野村	椋木 幸介	不詳	不詳		不詳	不詳	不詳	D

註 参考文献 A『教育沿革史草稿』 B『日本教育史資料』 C『教育沿革資料』 D『都濃郡史』
E『徳山市教育のあゆみ』 F『小学校史、郷土史』